持続可能な地球環境のために、今しなければいけないこと

教えてください、
あなたの考えるアクション・プラン

八十年代後半のバブルを謳歌した日本経済は、九十年代に入り、バブルの崩壊とともにそのつけを払わされることになった。右肩上がりの経済成長などあり得ないことを、日本人ははじめて実感として突きつけられたのだ。それも相当の痛みを伴って。

経済は人の営みである。食うか食われるかの真剣勝負ではあっても、人間同士の話である。であるから、その影響はごく限局された範囲、相当広く見積もっても人間社会だけにとどまり、地球という生態系に直接の影響を与えることはない。

一方、経済成長とともに発達した文明社会、その維持に必要なエネルギーの消費は、地球環境に直接の影響を与える。そして、壊滅的打撃をも与える可能性を持つこの消費バブルは、未だはじけてはいない。経済のバブル崩壊を体験した我々は、しかし、エネルギー消費のバブルには飽くことなくどっぷりと浸かっている。このバブルは、経済とはちがい、はじけてしまえば取り返しがつかないというのに。

文明社会、あるいは人間が地球に与えている影響を列挙してみることにしよう。化石燃料燃焼による二酸化炭素の放出の結果としての地球温暖化。森林破壊による炭酸固定能力の減少。ダイオキシンに代表される有害化学物質の生成。オゾン層の破

壊。

または、食物調達のための動植物の乱獲、化石燃料の乱採掘。ゴミの埋め立て。

どれもこれも、みな一つの方向へ向けての変化である。不可逆的環境破壊。地球という美しい容れ物を、どんどん汚していくことで、私たちのバブリーな文明生活は成り立っている。そう。我々は、地球に、地球に住むすべての生き物に迷惑をかけているのだ。

この自覚から、環境について考えて行くことにしたい。

我々は、地球に迷惑をかけている。あるいは、環境に負担を強いている。もちろん、野生動物だって獲物を捕らえれば糞もする、呼吸をすれば二酸化炭素だって吐き出す。環境に変化を与える、という意味では同じである。しかしそれは、生態系という環境の中で還元され得る物であるし、それだけの量しか、野生動物は生存を許されていない。

一方、人間の営みから放出されるゴミ、二酸化炭素、食べるために捕獲する動植物の量は、生態系という環境の中で還元できる量をとうに超えている。自然では処理できない量なのである。ダイオキシンをはじめとする有害化学物質のように、質的に自然環境では処理できないものも、人間は自然界に放出して

いる。

人間による環境汚染は、自然の自浄能力を遙かに超えているのである。

さらに人間は、限りある資源をも完全に消費し尽くそうとしている。地球が何万、何億年もかけてつくった化石燃料を一瞬にして燃やし尽くそうとし、家を造るため、紙をつくるために森林を伐採する。

人間は、地球を壊しながら、地球に住んでいるのである。

ではなぜ、この、たくさんの生物の住む地球の中で、我々人間の営みだけが、地球を壊していくのだろうか。

それは、人間だけが、文明によって自らの生活に安全と快適さを求めたからである。人間だけが、火を使い、道路を造って自らをほかの動物たちと隔離しようとしたからである。その結果、人間という生物だけが、通常生態系に許される個体数を大幅に超えて生存しているのだ。

たとえば、家の熱帯魚用の水槽で、大きなコイを何十匹も飼おうとする人はいないだろう。軒先につり下げた鳥小屋で、セキセイインコを何十羽も飼おうとする人もいないと思う。容れ物には、その大きさによって入れられる動物の数は決まっているのである。とくに生態学を学んでいなくても、私たちは常識

的にそのことを知っている。

しかし、この地球という容れ物に、どれだけの数の人間が住めるか、ということについては、ほとんどの人が考えたことがないだろう。地球は、見渡すことができないほど広いから、人間なんかはいくらでも住むことができるに違いない。そう思っている人が多いのだろう。

人間がまき散らすゴミや有害物質についても同じである。狭いトイレでタバコを何本もふかすと空気が汚れるのはわかるけれど、空は広いから、どれだけの有害物質をばらまいても飛んでって分からなくなるさ。こう考えて二酸化炭素を、ダイオキシンをまき散らす。

こういうことの積み重ねで、人間は、地球を少しずつ、蝕んできた。そして、経済バブルがはじけたように、環境バブルも、はじけそうになっている。

しかし、人間もただ地球を蝕んでいただけではなくて、その間に少しずつ知恵も付けたから、自分が地球を蝕んでいるな、ということが分かりかけてきた。そして、自分たちが生き延びるために、地球を大切にしなくちゃいけないな、とも思い始めてきた。

さあて、今からどうやって地球を修理しようか。

とはいっても、いきなり修理にははいれない。人間はシステムとして地球を汚しながら生きるサイクルを創りあげてしまったのだから、今こうしている間にも、地球を汚し続けている。それを、なんとかしないといけない。少しずつ少しずつ、地球を汚すのをやめていって、修理するのは、それから。でも、ゆっくりはしていられない。バブルはもう、はじけそうなんだから。

システムを変えるのは、痛みを伴う。それはたとえば、右肩上がりの経済成長の結果としてのバブル経済を謳歌していたそのときに、自分の手でそのバブルに終止符を打つことに等しいから。しかし、やらねばならない。今度のバブルは、はじけたら最後、つぎはないのだから。

地球に害を与えない生活。二酸化炭素を、大量のゴミを、ダイオキシンをばらまかない生活。森林を破壊しない生活。このような生活に戻るためには、捨てなければならない。何を。文明を。文明がもたらす便利で快適な暮らしを。または戻さなければならない。人口を、地球という容れ物に、人間という野生動物が生活できる適正な数まで。

では、どうすればいいのか。私の考えるキーワードは、生態系である。

先日、知人と環境について話をする機会があった。話は人間の所属する文明社会を生態系と捕らえるかどうか、についてだった。知人曰く、人間は、農耕、畜産などで食物を自給している。だから生態系とは切り離されている。故に、生態系は外部にあって保護する対象である。

つまり、学校教育で習った生態系とは、食物連鎖、食べる食べられるの関係である。鹿は草を喰らい、狼は鹿を喰らう。捕食者のいない狼は死んだら草の養分となり、植物、草食動物、肉食動物をつなぐ食物連鎖が完結する。人間は自分が食べるための植物、動物を自分で増やすことができるからこの食物の連鎖にはいることはない。だから人間は生態系の外に置かれている、という主張である。

これに対する私の主張はこうである。しかし人間は食物を自給するために狭義の自然を浸食しているし、二酸化炭素を還元し酸素を生成する炭酸固定はすべて森林に頼っている。つまり、生態系とは切り離されていない。よって、生態系は内部にあって相互に保護し、保護されるものである。

つまり、生態系というのは捕食、被食の関係だけではない。

主に動物が呼吸によって酸素を消費し二酸化炭素を吐き出すのを、植物が光合成によって二酸化炭素を消費し、酸素を吐き出すことによってバランスをとっている。窒素についても同様である。これら、植物にしかなしえない働きを、人間は自然界の樹木にほぼ全面的に頼っている。この事実を無視し食物の一部だけを自分で増やしているからといって、生態系には入っていないというのは人間の驕りではないか、という主張である。

結局議論はかみ合わず、私の主張を、知人がそういう考え方もあるよね、といなす形で終わった。しかし、人間は生態系に含まれないというこの考え方こそが、環境を考えず、エネルギー消費のバブルを生み出した最大の原因なのではないか、と私は考える。

つまり、生態系は人間が属する文明社会の外にあり、我々とは直接の関わりを持たない。故に、生態系が縮小しようが衰退しようが、さらにいえばなくなってしまおうが、我々の生活に直接の影響はない。であるから、生態系を保護する環境保護も大切であるが、我々の文明生活の維持とそれとをはかりに掛けた場合、文明生活の維持に傾くのは当然であり、環境保護は二の次である。なぜなら我々は生態系の恩恵など受けていないし、なくなったところで大して困らないのだから、という考えが、エネルギー消費バブルにブレーキをかけなかった原因なの

ではないか、ということである。

このような考え方は一見乱暴な極論のように思えるが、たいていの人が多かれ少なかれ思っていることを言葉にしたに過ぎないであろう。環境保護と、文明社会をはかりに掛けて、文明社会を捨てる選択が決して多数派を占めていないことは、現在のエネルギー消費バブルを見れば一目瞭然である。

しかし、我々は余りにも知恵を付けすぎてしまい、これからも同様の選択をし続けるには、地球は余りにも狭いことを知ってしまっている。

知ってしまった以上、我々は選ばなければならない。このままの、エネルギー消費バブルで地球を汚し続け、地球とともに滅びるか。あるいは、血を流し、痛みを感じながら文明社会を、ひいては人間の版図を縮小させるか。

人間は、科学技術の力を借りて文明社会を拡大し、地球を汚してきた。そして今、科学技術の力を借りて、汚れを少なくしようとしている。昨年、第三回地球温暖化防止京都会議（ＣＯＰ３）が京都で行われた。雪の京都で、世界のＶＩＰがロビーでごろ寝をしながら期間を延長してまで行われた会議では、各国の思惑が交錯し、様々な抜け道が用意されてはいるが、二酸化炭素の具体的な削減目標が国ごとに定められた。日本の削減

目標は、２００８年から２０１２年の五年間について、１９９０年を基準として６％の削減を行うこと、である。現在日本は、年２％の割合で、エネルギー消費量が増加している。その中での、１９９０年を基準としての６％削減である。政府はこれを達成するため、２・５％を技術革新、国民の努力で削除し、３・７％を森林による吸収によってまかなうことを掲げた。２・５％は、原子力発電の強化、省エネ製品の普及、サマータイムの導入検討などにより可能になるらしい。

二酸化炭素の放出量は、文明社会が地球にかける迷惑の量の指針となるから、これを削減する動きが世界中に広がるのはとてもよいことだと思う。たとえ目標に達しなかった分はお金で解決できるようなザル規制だとしても、ないよりはよいだろう。

しかし、気になるのは、その削減のための手段が、技術的なことにほぼすべて依存していることである。確かに黒煙をまき散らすディーゼルトラックよりは、新開発の低公害車の方が二酸化炭素の放出量が少ないだろう。過剰な街灯を暗くしたら、エネルギーの節約になるかもしれない。これらの技術革新、節約によって、きっと２００８年には６％の削減が達成されているのだろう。我々の生活は何も変わらずに。そしてまた、年に２％ずつ地球にかける迷惑が増えていく。

その繰り返しの中で、省エネルギーの技術が限界に達したら、そのときはどうするのだろう。二十一世紀はそれで乗り切れたとして、そのつぎの百年は大丈夫なのだろうか。自分の暮らしは何も変えないで、地球に迷惑をかけない科学技術を、人間は発明するのだろうか。

エネルギー消費削減が叫ばれている一方で、人口は爆発的に増加中である。天敵のいない、疫病のかなりの部分をワクチンにより克服した人間は、産めよ増やせよ地に満てよの本能の欲するままに、文字通り地に満ちようとしている。

科学技術によるエネルギー削減は、この人口増加をも吸収しなければならない。つまり、一人一人が消費するエネルギーを少なくするのではなくて、人類全体で消費するエネルギーを減少させなければ意味がないのである。そんなことがいつまでできるのであろうか。単純に考えれば、人口が倍になれば食物も倍必要だし、トイレットペーパーだって倍必要である。いや、人口が増え、人間の版図が広がれば、文明社会を隔てる地理的な壁もなくなり、すべての人間に文化的生活が行き渡るであろう。そうすれば、現在エネルギーを大して消費していなかった人たちも、我々と同じようにエネルギーを消費するようになる。これらのエネルギー増を、科学技術は本当に吸収できるの

だろうか。

残念ながら、私はそうは思わない。現在の科学技術は、エネルギーを消費することにのみ向かっていて、自らエネルギーを作り出す、永久機関をつくることはできない。技術革新によって、エネルギーの消費量が画期的に減少したとしても、方向として消費に向かうことにはかわりがない。科学技術に頼った解決法は、先が見えているのである。

我々は、地球への負担を軽減することではなく、負担をなくすことを最終目標に置かなければならないのだ。そうでなければ、最終的に環境破壊を止めることはできないのだから。

では、どうすればよいのだろうか。

私の提唱するキーワードは、先に掲げた、生態系である。人間が生態系の中で生きていることを実感し、エネルギー消費を許容させるレベルにまで落とし、真の意味でのリサイクルを徹底することでのみ、地球を汚すことをやめ、環境と共に生きていくことができるのではないだろうか。

そのためにもっとも必要なのは、人口の削減である。水槽のコイを例に持ち出すまでもなく、人間の数は、この地球上に生きて行くには多すぎるのである。

政府、もしくはＣＯＰの様な国際会議が現在の技術水準で現

在の文明レベルを保ったまま地球上に生活できうる人口を徹底的に調査して、公表する。もちろんその数字については、学術レベルから野次馬レベルまで、徹底的に議論する。そして、その数まで平和的、段階的に人口を減らすこと。これが環境と共に生きていく為の急務であろう。

もちろん、技術革新によるエネルギー削減はどうしても必要だ。エネルギー削減の技術は、地球上に生きることのできる人間の数を増やすことになろう。しかし、それではエネルギー消費による環境の崩壊を先延ばしにするだけで、根本的な解決にはなり得ないのだ。

繰り返していおう。野生動物として存続できる数にまで人口を減らすこと、これが環境破壊をくい止める最善にして唯一の道なのである。

一口に人口を減らすといっても、それが困難であることは想像に難くない。もちろん性急に非平和的手段、破壊的手段にたよることは論外であるが、それ以外にも人口の減少を妨げる社会的要因を探すことは困難ではない。日本での少子化が、社会的に問題とされたり、中国での一子政策が大量の無戸籍の子供を作りだしている現状を見渡せば、現在の社会のシステムが、人口が増え続けることを前提につくられていることが分かるで

あろう。人口の減少、いちばん単純には産まれてくる子供の減少であるが、それは農業国に於いては働き手の減少を、工業国に於いては年金制度の破綻を意味する。また、人口減少による国力の相対的低下も、現在の社会情勢の中では見逃せない危険である。つまり、現在のシステムの中では、人口を、産まれてくる子供を減らすことは、自分の暮らし、社会情勢にとって、不利に働くことはあっても、有利に働くことはほとんどないのである。

しかし、それらの弊害は、皆人間社会の内部でのことである。地球という容れ物自体が環境破壊によって危機的状況にさらされているのに、人間社会内部のことにこだわって手を打てないというのは、わずかな餌を取り合っていて沈没船から逃げ遅れるネズミのごとく愚かな行為ではないか。

であれば、我々はまた、つくらなければならない。安心して人口を減らせる社会を。安心して家族の働き手を、年金の担い手を、そして兵隊の数を減らすことのできる社会を。そのような社会をつくることが、結果として環境汚染をなくし、地球と共存するために必要なのである。

地球という容れ物に、いつまでも住み続けたいのならば、い

くつかの守らなければならない決まり事がある。しかし、いつの間にか人類だけは、そのルールを破る力を手に入れてしまい、無自覚のうちにそれを侵し始めた。そして、ルールを侵してしまったことに気がついたいま、その内側に自らを修正しようとしている。侵した時と同じ、科学文明という力に頼って。また、ルールの方にも少しだけ広がってもらうことにして。でも、ルールを破ることによって生まれた文明生活の快適さを忘れようとはしないから、いつの間にかまた拡げたルールから外れていく。

そんなことでいいのかな。

そんなことで、この先も、ずっと地球と仲良くやっていけるのかな。

でも、そりゃあ少しは負担になっているのかもしれないけれども、現に我々は地球とうまくやっているのだから、これからだって上手くやっていけるはずじゃないか。人間は、この地球の環境を変えるほどの科学技術を持っているのだから、もし地球の環境がいまよりずっと悪くなったって、技術の力でなんとかできるさ。これだけの繁栄をしている人類が滅びてしまうなんて、そんなことあるわけないじゃないか。

現在のところ、世論ではこのような意見が大半を占めている

だろう。そしてこれからも。二酸化炭素による地球温暖化によって、水辺の都市がいくつか水没したり、大気汚染によって身近な動物、植物が姿を見せなくなるまでは、この楽観論が大勢を占めることは想像に難くない。

しかし、それからでは遅いのだ。我々が肌で感じるような影響が出てからでは、もう、崩れゆく環境を元に戻すことなど出来はしないのだ。もっと悲観的になればいい。大げさでも扇情的でもいいから、環境が大変だと、騒がなければダメだ。個人レベルの自覚は、環境破壊のバブルがはじけるのを、少しだけでも、確実に遅くするのだから。

いまなら、まだ間に合う？　呑気なことをいっていてはいけない。まだ間に合うではない。いまでなければ間に合わないのだ。

科学技術の進歩と、個人レベルの自覚によるエネルギー削減。そしてそれと並行しての安心して人口を削減できる社会づくりと少子化政策の徹底。この四点が速やかに実施されたとき、地球環境は崩壊のバブルを膨らませるのをやめるだろう。そして我々は、真に生態系を構成する一員として地球に認めて

もらえるだろう。

願わくば、そのとき現れる世界が、ジョン・レノンが夢見た世界と同じものでありますように。